

まちづくり+クリエイティブ - 市民参加の方法論、風の人からの提言 -

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業
『集合住宅「団地」の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究』

“水”の人

その土地に寄り添い、種に水をやり続ける存在。中間支援的存在。



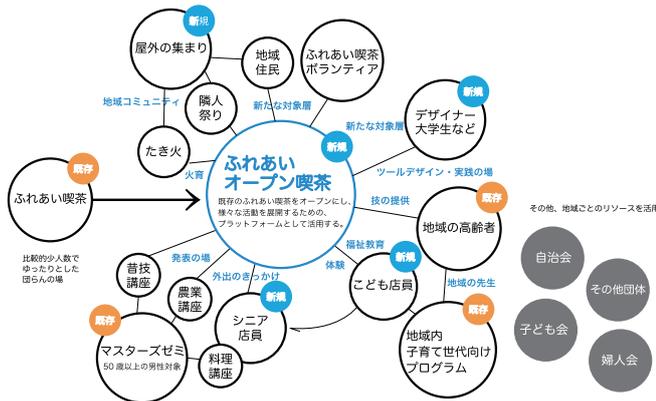
“風”の人

その土地に「種」を運ぶ、刺激を与える存在。



“土”の人

そこに居続ける存在。しっかり根を張り、活動し続ける存在。

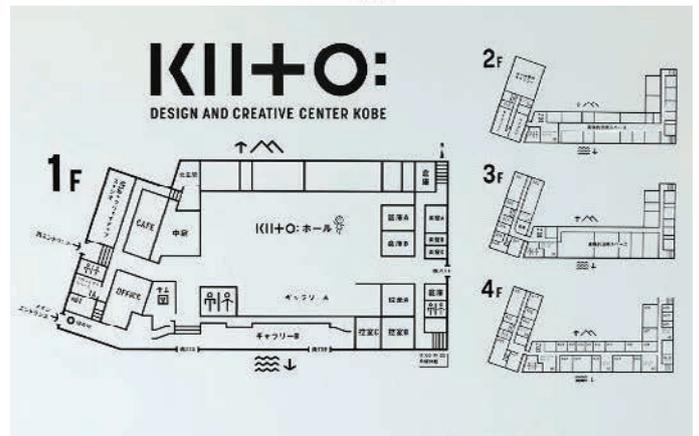


楽しみながら学ぶ新しいカタチの防災訓練

『イザ！カエルキャラバン！』



イザ！
カエルキャラバン
MESSAGE FROM 1995 AT KOBE



風の人、水の人、土の人、それぞれの作法

まちづくりにおける「人」の「作法」の考え方として、「風の人」「水の人」「土の人」という考え方をを用いている。「風の人」とはその土地に種を運ぶ、刺激を与える存在である。「水の人」とはその土地に寄り添い、種に水をやり続ける、中間支援的存在であり、NPO や行政が担い手になりやすい。この「水の人」を探ることが「風の人」の役割でもあり、そのプログラムが持続的に行われていくための鍵となる。「土の人」は、そこに居続ける存在、しっかり根を張り、活動し続ける存在であり、市民や地域などの地縁的で土着的な人々のこととなる。

それぞれ「風の人」から「水の人」のようにその土地の魅力に気付き常駐という形で地域と関わり続けることを決める人や、「土の人」から「水の人」のようにその地域の元気で積極的な人が、プログラムの担い手になっていくこともある。

以下では、「風の人」としての関わり方、そしてこれまでに関わってきたプログラムについて紹介する。

不完全プランニング

まちづくり活動において、地域住民の積極的な参加や交流を促すプログラムは、不完全な形がいいのではないかという考え方である。イベントがパッケージ化されると地域住民が運営として入る余地がなくなるのである。入り込む余地のある「不完全」の状態が、住民が関われる状況を生みだし、やがてそれは住民自身のものになっていくのである。

+クリエイティブ

クリエイティブには「創造的な」という意味があり、語源には「ぶち壊す」という意味がある。つまり、クリエイティブを「今あるモノをぶち壊し、新しい何かを作り出すこと」とであると考えれば、これまでの事業やプログラムを根元から見直し、既成概念にとらわれず、広い視野で、違う角度から、考えてみる大切になってくる。そしてそこに、アイデアや工夫、デザインやアートを注入して、プログラムの新しい形を生み出すということが、「+クリエイティブ」の本質的な意味である。



図1. 神戸で開催されたイザ！カエルキャラバンの会場

■イザ！カエルキャラバン

2005年に神戸市に依頼され始まったプログラムであり、これまでの参加者の少ない地域の防災訓練とは違い、楽しみながら学ぶ新しいカタチの防災訓練としてたくさんの住民が参加する仕組みを提案している。



図2. 楽しんで参加する子供達

○防災訓練 + 「かえっこバザール」

これまでの防災訓練では、若いファミリー層の参加が少ないという問題があったことに対して、「かえっこバザール」というプログラムを組み込んだ。これによりファミリー層が多く参加し、リピーターも多く、楽しいイベントと組み合わせることで、新しいカタチの防災訓練を提案し、「地域の祭り」や「学校行事」の中に、組み込まれるかたちの「防災訓練」になっていく。

「かえっこバザール」とは、子供にいらぬおもちゃを持ってきてもらい、それをポイントと交換し、その

ポイントを使って他のおもちゃを買う仕組みである。防災ワークショップに参加しても、ポイントをもたらる仕組みになっているため、子供たちは積極的に様々な防災ワークショップに参加することになる。プログラムの最後に人気のおもちゃのオークションを行うことで、ポイントをためて防災ワークショップに参加すること、最後まで帰らずにイベントに参加することを実現している。



図3. かえっこバザールの様子

○調査に基づくプログラムとツール

この防災訓練のプログラムが実施されるにあたって、1995年の阪神淡路大震災から「防災の教訓」に関する調査を行っている。インターネットや震災体験手記などから様々な記録を調べていくのと同時に、実際に震災を体験された方々から話を聞くことで、被災時にどのような知識や技が必要になるかということを徹底的に調査を行った。それらの調査から、これまでの防災訓練をも

う一度見直し、新しいプログラムやツールを考え出した。

これまでに防災訓練で行っていたプログラムや、調査から挙げた新しいプログラムに対して、より楽しんで参加してもらおう「+クリエイティブ」な視点として、地域だけでプログラムを作るのではなく、アーティストやグラフィックデザイナーや職人に、それぞれのプログラムで使うツールの作成を依頼し、共同でプログラムをつくった。



図4. 共同でつくったプログラムの例

○まちに溶け込ませる仕組み

基本的には、PTAや地域の自治会などから依頼を受けて、講習会の開催や、ワークショップで使用するツールの貸し出しというかたちでの支援を行う。2か月前からイベントを行う地域のコアメンバーに講習会を行い、その後ボランティアスタッフも加えての2回目の講習会の後、開催までの期間を掛けて地域の人が主体となってイベントのプログラムやワークショップを作り上げる。

ほとんどのプログラムを住民が考えるようにすることで、各地で独自

のプログラムやツールができて、住民主体のイベントになっていく。

アジア圏を中心とした世界各国でも様々なカタチで防災訓練が行われている。



図 5. 住民が準備している様子

○ローカライズ化

神戸から始まったこの「イザ！カエルキャラバン！」は、それぞれの地域で工夫され、発展しており、様々な支援のかたちを経て地域特有の行事になっている。

手芸や日曜大工などの特技を生かしたオリジナルツールの作成や、カエルの代わりに地域で人気のキャラクターを用いたり、地域の資源を利用して作成するなどの工夫が見られる。他にも、アイデアを出し合って独自に開発されたプログラムを行なう事例が日本各地で見られる。



図 6. ローカライズ化するプログラム

■高齢者福祉＋クリエイティブ

ふれあいオープン喫茶

元々、高齢者の引きこもり解消のために行われていた「ふれあい喫茶」を「ふれあいオープン喫茶」として、多様な仕掛けを施すことによって、地域の人材や団体などのリソースをからめ、地域の多様な世代、団体が一堂に会するプラットフォームを形成することを目的とした活動である。

○関わり方

支援ツールとして、ロゴマークをグラフィックデザイナーに、カフェのツールとしてエプロンやテーブルクロスをデザイナーと地元の芸術大学が共同で制作するなど、質の高いツールを準備する。このようなツールの貸し出しや、今後自分たちで制作できるノウハウを教えるなどの支援を行う。このような支援の仕方でも、子供や高齢者が喜んで参加するようになり、人が集まる重要な仕掛けになる。



図 7. 紙食器ワークショップの様子

○準備

実際に「ふれあいオープン喫茶」開催のための準備はほとんどが地域住民の手でおこなわれた。普段からおこなっている「ふれあい喫茶」や学童保育などでは告知も兼ねて紙食器をつくるワークショップをおこない、集会所を会場にして子供が飾りつけをした。

○当日とその後の展開

当日はカフェ店員を子供達が担当することでお客として来店した高齢者との交流が生まれた。「ふれあいオープン喫茶」は高齢者が子供達と関わるきっかけをつくる良い機会を生み出した。子供が関わると、その親世代にも関わりが生まれ、プログラムが様々な地域の団体を巻き込んでいくことができる。そしてそのプラットフォームから地域の様々な活動へと拡大することが可能になる。



図 8. ふれあいオープン喫茶の様子



図9. 神戸港を望む、デザイン・クリエイティブセンター神戸の全景

■デザイン・クリエイティブセンター神戸

デザイン・クリエイティブセンター神戸（以下 KIITO）は、神戸で暮らす様々な世代、職業の人々が交流し、自分たちのまちや生活に新たなデザインを創造できる場であり、そこから生まれるアイデアは実際にまちに還元されていく仕組みを持っている。神戸港近くにある元生糸検査所が拠点で、デザインやアートにまつわるゼミ、レクチャー、展示、イベントを開催するほか、貸ホール、貸ギャラリー、貸会議室、クリエイティブラボ（オフィス入居）スペースなどがある。

○事業化を目指す実践的なゼミ

KIITO では実際に社会問題（問題提起は行政や企業）に対して、デザインを活用した解決をテーマにした教育プログラムとして、「+クリエイティブゼミ」を開催している。参加者は、その社会問題に対して興味のある市民で、世代も職業もばらば

らである。ゼミ生をチームに分けて、課題に対して調査、議論を行ない、各チームが問題解決に向けた企画を作る。そして、最後には課題提供者に企画を提案し、評価を得れば事業化を目指して実際にプロジェクトが始動するプログラムになっている。



図10. KIITO の様々なプログラム



図11. クリエイティブゼミの様子

○「オールドタウン化問題」について考えるゼミ

神戸須磨区役所、神戸市都市計画総局とタイアップして神戸市内で典

型的なオールドタウン化問題を抱える「高尾台」地区を対象に、約3ヶ月に渡ってこの問題に対して解決につながるような新たな発想や企画を考えるゼミを行った。参加者は4チームに分かれ実際にまちを歩き、居住者に話を聞くなど、地域と深く関わりながら企画について議論した。

最終発表には、地区の居住者にも参加してもらい各チームの企画や提案を発表し、議論を行った。その後、地区ではゼミ生の発表を元に自分たちに出来ることを見つけて、プロジェクトチームの支援を受けながら実施にむけて準備をすすめている。



図12. 提案を整理し実施していく

■まとめ

防災や高齢化など社会の課題を「風の人」として「+クリエイティブ」をコンセプトに解決してきた事例について紹介した。全てに通ずるのは「風の人」としての「作法」（その土地に「種」を運び刺激を与える存在）である。「風の人」として、一時的な関わり方をするために、デザインやアートを注入した様々な支援のかたちがあり、そのかたちを生み出すのは一時的ではあるが地域と徹底的に関わり、調査を行う姿勢である。それが「水の人」を発掘し、「土の人」を元気にする「風の人」の「作法」である。

『まちづくり+クリエイティブ
- 市民参加の方法論、風の人からの提言 -』

レクチャー：永田 宏和（NPO 法人 プラス・アーツ 理事長）
記録・作成：芦田 康太郎（関西大学大学院 博士前期課程）
倉知 徹（関西大学 先端科学技術推進機構）

（講演：2013年7月17日）
本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究（平成23年度～平成27年度）」によって作成された。

発行：2013年8月

関西大学
先端科学技術推進機構 地域再生センター
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
先端科学技術推進機 4F 団地再編プロジェクト室
Tel : 06-6368-1111 (内線:6720)
URL : <http://ksdp.jimdo.com/>